

名誉会員 第7期会長

石田頼房先生のご逝去を悼む

農村計画学会第7期会長をされた東京都立大学（現、首都大学東京）名誉教授石田頼房先生が2015年11月4日に逝去されました。享年83歳でした。白髭の石田先生の温顔に接することも出来なくなったかと思うと残念です。謹んでご冥福をお祈り致します。

石田先生は1932年に東京都武蔵野市に生まれ、東京大学工学部建築学科を卒業、同大学院建築学（都市計画学）を専攻、工学博士を取得（1961年）、東京都立大学工学部助手、助教授、大学院都市科学研究科教授、都市研究所長を歴任、名誉教授。工学院大学教授も4年ほど務められた。

石田先生は大学院で、「人口の著しい都市集中と都市内部人口の周辺分散から起きる散落状市街化現象」は、都市経営上も生活上も問題が多く、土地利用計画が立案し難いことを問題視し、その実態、原因を調べ、規制手法を提案した博士論文「大都市周辺地域における散落状市街地化の規制手法に関する研究」（1960年）をまとめられた。

石田先生は1960年に東京都立大学工学部建築学科助手に着任、博士論文で取り上げたテーマの研究を続け、1982年に「市街地形成とその規制手法に関する一連の研究」で日本都市計画学会論文賞を受賞された。続いて明治以降の近代都市計画制度と計画手法の進展、関東大震災後の復興都市計画、戦後復興期の都市計画、新都市計画法と計画規制など、日本近代都市計画史に関する研究をまとめた著書「日本近代都市計画の百年」（自治体研究社、1987年）を出版し、「日本近代都市計画史に関する一連の研究」で1991年に日本建築学会論文賞を受賞された。21世紀を迎えた2004年には、「日本近代都市計画の百年」に章・節を増補改訂して、新しく「日本近現代都市計画の展開 1868 - 2003年」（自治体研究社）を出版された。追加した内容は、「10章 10-3 1992年都市計画法改正の意義、10-4 阪神・淡路大震災とまちづくり、11章 21世紀の都市農村計画を展望する、（都市計画と地方分権、国土総都市化か都市農村計画か、など21世紀的計画風土構築の方向等）」で、巻末に39頁に及ぶ「日本近現代都市計画史年表」を付けている。

日本建築学会は石田先生の長年の日本近代都市農村計画史研究と、阪神・淡路大震災からの復興への取り組み等の功績を認め、「我が国における近代都市計画史の研究とその発展に尽くした功績」で2004年に日本建築学会賞大賞を授与した。

石田先生の農村計画・集落計画に関する主な業績は、1965年から始まった戦後最大の農地・農村開発プロジェクト「秋田県八郎潟干拓地新農村（大潟村）建設事業」の集落地計画策定のために設置された「日本建築学会八郎潟建設特別委員会」（高山英華委員長）で浦良一幹事、井手久登委員らとともに、500戸を超える緑豊かでクルドサク（袋小路）型道路計画による住区総合中心地計画を策定し、1964年度日本都市計画学会石川賞を受賞されたことである。

続いて、1973年から浦良一主査、石田頼房、木村儀一委員を中心とした農村基盤整備パイロット事業計画委員会で愛知県常滑市矢田地区集落整備基本計画を策定した。この計画は「新建築学体系18集落計画」（彰国社、1986年）に集録され、石田先生は農山村計画をめぐる政策の展開、農山村の現状と農村計画の課題、都市近郊農村における計画、集落整備基本計画等を説明している。

石田先生は最後の著作となった前掲の「日本近現代都市計画の展開」の「あとがき」に「歴史の中に生きて」「現代史・同時代史の難しさ」「世界都市計画史のなかで」などを書き、最後に「この本が、高山英華先生と裕子（石田夫人）という、きわめて異なる、しかしどちらも大事な立場で日本の都市農村計画にかかわった二人にささげるにふさわしい内容になっていることを願ってやみません」と結んでいる。

合掌

荻原正三（工学院大学名誉教授）

